群教セ	G05 - 08
	平14.207集

創造的な表現技能を高める素描指導の工夫

― 観察と表現を結びつける活動を取り入れて ―

特別研修員　　田中　彰　（前橋市立広瀬中学校）

《研究の概要》

本研究は、素描の学習で、生徒の創造的な表現技能を高めるため、観察と表現を結びつける活動を取り入れたものである。具体的には、導入の過程で、形や明暗を対象に即して見取れるような観察と表現を結びつける活動を取り入れたり、制作の過程で、修正の視点に気付くような観察と表現を結びつける活動を取り入れたりして、生徒一人一人の創造的な表現技能を高めるための指導の工夫を図ったものである。

【キーワード：美術－中　素描　創造的な表現技能　観察　結びつけ】

Ⅰ　主題設定の理由

絵を描いたり物を作ったりすることを通して自己表現することは、児童生徒にとって、もともとは、面白く楽しい活動である。しかし、小学校の低学年までは、みな大好きだった絵を描く活動が、「本物らしく描きたい」という欲求の高まる中学年から高学年になるにつれ、自分の表現に満足できなくなる。そして、多くの中学生に至っては、「絵を描くのは苦手」と思うようになっている。観察に基づく写生的な絵であれ、想像に基づく空想的な絵であれ、表現するための前提となるのは、物をよく見取ったり、細部の特徴に気付いたり、形・色・質感などをとらえ、表現する能力である。こうした「創造的な技能」を伸ばすことは、自分の思いや考えを形にするための裏付けとなるものである。多くの生徒が一度は、苦手意識を持ってしまった絵の表現を、再び、楽しく面白いものとして復活させたい。生徒たちがもともと持っている、創造的な力、思いのままに絵を描く力を引き出し高めたいと考える。

実態調査から、本校の２・３学年のおよそ４割の生徒が、「美術は苦手」と答え、その理由として「絵が下手」「うまく描けないこと」をあげていた。そこで、自分の片方の手を観察し「明暗の調子をつけて立体感をだすこと」を条件に鉛筆で素描を行ってみると、観察に基づいて正確に形をとれている生徒は全体の約２割であった。残りの約４割の生徒は、部分的には形をとらえているが、全体と部分のバランスが不十分な素描になっており、残りの作品は、大づかみで概念的な素描表現であった。また、全体的に、鉛筆の線の表現が硬くぎこちなかったり、弱々しく、強弱の幅が乏しいなど、描画材としての鉛筆を十分活用できていないことも分かった。

こうした表現の未熟さの背景として考えられるのは、第１に、目測の誤りがあり、部分と全体との比例に着目できず、形を修正できていないことが考えられる。第２に、描く物を、先入観や概念（手はこのようなものという思い込み）で描いてしまい、物を見ていても、自分の表現と対象との違いを見取れていないことが考えられる。いずれにせよ、観察を表現に結びつける過程で、形や比例を見極めていないことが原因である。

これらのことが「絵を上手に描けない」という苦手意識の元となり、意欲的に取り組んだり、多様な表現を工夫したり、楽しんだりすることを阻む障害となっている。

これまでの指導は、参考作品でイメージや手順を示し、材料や表現方法などを選択できるようにしてきたが、仕上がった作品の中には、形や量感を見取って表現する段階まで到達していないものが少なからず生まれていた。そこで、観察と表現を結びつける指導の工夫が必要であると考えた。その指導の工夫として、観察と表現を結びつける活動を取り入れることにより、対象の形や部分と全体の比例を見極めたり、自分の表現と比較し、違いに気付いて修正したりすれば、よりよい表現に結びつけられるようになり、生徒一人一人の創造的な表現技能を高められると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

素描の学習において、観察と表現を結びつける活動を取り入れることにより、生徒一人一人の創造的な表現技能を高められることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究の見通し

1　導入の過程において、形や明暗を対象に即して見取れるような観察と表現を結びつける活動を取り入れれば、よく観察して描く姿勢が育ち、対象の形・明暗・質感などの特徴をとらえて描けるようになるであろう。

2　制作の過程において、修正の視点に気付くような観察と表現を結びつける活動を取り入れれば、修正してよりよく表すことができ、創造的な表現技能を高めることができるであろう。

Ⅳ　研究の内容と方法

1　研究の内容

(1)「創造的な表現技能を高める」とは

対象の形・明暗・質感などの特徴をとらえ、自分の表現を新たに見直し、表現の工夫をして、よりよく表せるようになることである。

(2)「観察と表現を結びつける活動」とは

対象の形、部分と全体の比例を見極め、自分の表現と比較し、違いに気付いて加除修正しながら、よりよい表現に結びつける活動である。具体的には次の２点である。

○　形や明暗を対象に即して見取れるような観察と表現を結びつける活動

導入の過程において、始業課題として、既成の概念では形がとれないような対象に繰り返し取り組む活動である。形や明暗を対象に即して見取り、見取ったことに基づいて線や調子を描きこんでいくことによる観察と表現を結びつける活動である。

この活動は、単元学習までの始業課題として、形や明暗を見取って描く基本姿勢を養うとともに、鉛筆の扱いとその特徴に習熟できるようにするものである。

○　修正の視点に気付くような観察と表現を結びつける活動

制作の過程において、図形にあてはめたり部分と全体の比例を見たりするなど、修正の視点を示し、目測を吟味、修正するなどの観察と表現を結びつける活動である。

この活動は、対象の外形や部分の端点を結ぶ線を、いきなり確定した線を描くのではなく、単純化した図形など、それに置き換えられる形に解釈したり、外形を大まかにとらえ、目測による「あたり（見当)」をつけて試行錯誤の線を軽く描きながら、加除修正していく中で、形を正確にとらえ、明暗・質感の表現につなげていくものである。

2　研究の方法

(1)　授業実践計画

対　象	前橋市広瀬中学校　　２年Ｃ組	抽　出　生　徒
教　科	美術　「身近な静物を描く（素描）」	生徒Ａ：手の素描では、ほぼ概念で描いているので、観察に基づいて描く感覚を身につけ、創造的な表現技能の向上を図りたい。
期　間	平成14年９月５日～始業課題開始 ・10月中旬まで、全４回10～15分程度　の素描訓練 ・10月17日より単元の学習開始 ・11月７日まで単元学習（４時間）	生徒Ｂ：手の素描では、部分は見取れているが全体との比較が不十分で描線も弱い。比例を見取り力強く表現できるよう表現技能の向上を図りたい。

(2)　検証計画

見通し	検　証　の　観　点	検　証　方　法
1	導入の過程において､始業課題「よくみて描こう」のモチーフとして設定した「丸めた紙のしわ」「誰かの耳」「手のしわ」「つぶした缶」という既成の概念では簡単に描けないものを設定した。そして、一人一人が目標を明確にもち、対象に即して形や明暗などを見取るために、ゆっくり線を描いたり、数本の淡い線を描く中で一番よい線を決定し描いたり、光の方向を考えて明暗を描いたりするなどの活動を取り入れたことは、対象の形・明暗・質感などの特徴をとらえるのに有効であったか。	・素描作品 ・活動の観察 ・ワークシートの記述
2	制作の過程において、モチーフの外形や部分の形をだ円や四角、円柱や直方体などのわかりやすい図形に当てはめてみたり、全体と部分の大小や対比を見るなど修正の視点を示して、目測を吟味修正する活動を取り入れたことは創造的な表現技能を高めるのに有効であったか。	・素描作品 ・活動の観察 ・最終アンケートの記述

Ⅴ　研究の展開

研究の見通しに基づき、以下の計画で授業実践を行い、検証する。

1　題材名及び題材の内容

題材名	身近な静物を描く（素描）
題材の内容	本題材は、身の回りの静物をモチーフとし、対象をよく観察し、鉛筆で素描表現する活動である。基本的な描画材としての鉛筆の扱い、持ち方、調子のつけかたを練習し、習得することと、モチーフ全体の形や部分との比例の関係を見取り、明暗や質感の特徴をとらえて観察に基づいて表現する態度や、制作過程の自分の表現と見比べて修正する、創造的な技能を育てること。絵を描くことの面白さ、楽しさを味わうとともに、美しく表現することの難しさ、奥深さにも触れることをねらいとした題材である。

2　目　標

身近な静物を観察し、対象のよさや美しさを、表し方を工夫して素描で表すことができる。

3　題材の評価規準

おおむね満足できる状況	十分満足できる状況
美術への関心・意欲・態度	
モチーフ（身の回りの静物）のよさや美しさに関心を持ち、じっくりと観察して、それらを感じ取ったり発見しようとしたりする。	自分が表現したい身近なモチーフを主体的に選んだり、モチーフを深く観察し、表現意図を明確にもって創意工夫しようとしたりする。
発想や構想の能力	
モチーフをよく観察し、感じ取ったことを基に、形・明暗・質感などを意識して、画面の大きさや配置を工夫する。	モチーフを深く観察し、自分が表したい感じを意識して形・明暗・質感などに特徴を見いだし発想し構想する。
創造的な技能	
モチーフの形・大きさ・明暗などに注意しながら、表し方を工夫し、表したい感じを大切にして素描表現する。	モチーフの形・大きさ・明暗などを正確にとらえ、描画材の性質を生かして、美しく効果的に素描表現する。

4　指導と評価の計画（全 4時間計画）　　━━━の枠内は見通し

過程	時間	○ねらい ・主な学習活動	支援及び 指導上の留意点	学習活動 の具体の評価規準 関心・意欲・態度	発想･構想の能力	創造的な技能
導入		課題「よくみて描こう」 始業課題① 10分 「丸めた紙の皺を描く」 始業課題② 15分 「だれかの耳を描く」 始業課題③ 10分 「手のしわを描く」 始業課題④ 40分 「つぶした缶を描く」	・ゆっくりとした線で、外形、輪郭を追っていくこと丁寧に調子を付けていくことなどを支援する。	・モチーフのよさや美しさに関心を持ち、じっくりと観察して、それらを感じ取ろうとしている。 十分満足できる状況のキーワード ・深く観察	*見通し 1*	・対象の形・明暗・質感などに注意しながら表し方を工夫し、表したい感じを大切にして素描表現する。 十分満足できる状況のキーワード ・正確に
制作	1	○素描の参考作品の魅力を知り、鉛筆による表現の基礎を身に付ける。 ・作家や生徒の素描作品を見る。 ・鉛筆の持ち方を知る。 ・タッチの種類を知る。 ・グレースケール作りをする。	・丹念に描かれた素描作品、形や量感、質感をしっかりとらえた参考作品を掲示鑑賞する。 ・鉛筆を寝かせて持ち数種類の線をスケッチブックに描いて感覚をつかめるようにする。 ・中心線、補助線、縦横の比例の見方、あたりの付け方を指示する。	①素描に関心を持ちそのよさや美しさ、表現の特質などを感じ取り、技能の習得に意欲的に取り組んでいる。 十分満足できる状況のキーワード ・課題に忠実に ・深く観察する 生徒の様子、始業課題の素描作品やﾜｰｸｼｰﾄの記述から		①素描の表現のよさ美しさを理解し、表し方を工夫してグレースケールを丁寧に仕上げられる。 ・つぶした缶を縦横の比や明暗の調子でとらえることができる。 十分満足できる状況のキーワード ・美しく、効果的に 表現の丁寧さ、美しさ、ﾜｰｸｼｰﾄの記述 〈努力を要する生徒への手だて〉 ・画面の入れ方、縦横の幅、比を見て評価したり修正を勧めたりする。 ②線、調子の強弱、濃淡など、変化をつけながら美しく仕上げている。 〈努力を要する状況の生徒への手だて〉 持ち方、調子の付け方をみせる。
	2	○つぶした缶をモチーフとして修正の視点を身につける。 「つぶした缶」を描く。	・薄く軽くあたりをつくることから始めワークシートに取り組む。	②気に入ったモチーフを探し、置き方描き方の工夫をするなど、主体的に素描表現に取り組んでいる。 十分満足できる状況のキーワード ・主体的、積極的 途中の制作過程，作品、ﾜｰｸシート 〈努力を要する状況の生徒への手だて〉 事前にﾓﾁｰﾌ候補を持ち寄り検討するようにする。	①その生徒なりのモチーフを用意し、画面への入れ方や置き方、自分の表したい感じを工夫して表現している。 十分満足できる状況のキーワード ・独創的 ・個性的 ・効果的	
	3	○視点を生かし本制作を行う。 「静物を描く」 ・思い入れある物をモチーフとする。 ｱ　組み合わせや置き方を工夫する。 ｲ　構図を決め当たり（見当）を付ける。	・生徒の持ち寄った物を大きさや形の複雑さなどを見極め、配置、組合せ等検討する。 ・外形をとっていく上で中心線補助線を活用できるように促す。			

	4	ｳ　修正しながら形を決定していく。 ｴ　形を強め、明暗の調子を整えて完成する。	・修正の視点として縦横の比、基本図形の当てはめ、部分と全体の比例について見極め、加除修正することを支援する。	（努力を要する状況の生徒への手だて〉 ・形や明暗の狂いを見取り、さりげなく示唆し修正に導く。	ラフスケッチや描きはじめの構図、制作過程、仕上がった作品から判断する。 *見通し２*	十分満足できる状況のキーワード ・個性的、独創的 ・正確な外形 ・統一感ある表現 明暗表現

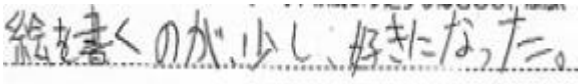
Ⅵ　研究の結果と考察

1　導入の過程において、形や明暗を対象に即して見取れるような観察と表現を結びつける活動を取り入れれば、よく観察して描く姿勢が育ち、対象の形・明暗・質感などの特徴をとらえて描けるようになるのに有効であったか

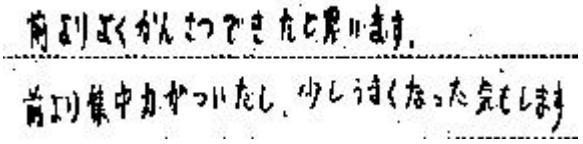
導入の過程において、最初に始業課題として取り組んだものは、「丸めた紙のしわを描く」であった。生徒たちは、「絵が上手に描けるようになる訓練だよ。」という教師の言葉に、笑顔をみせながらモチーフの紙を丸め、紙のしわを鉛筆で描いた。次は「だれかの耳を描く」、「手のしわを描く」と、毎週、始業の十数分間、素描に取り組んだ。教室には生徒の走らせる鉛筆の音だけが聞こえた。「とにかく、よ～く見て、ゆっくり線を描こう。」と助言した。最終課題の「つぶした缶を描く」では、始業課題としての時間枠を超えて丸１時間の計画にしたところ、明暗の調子や表面の文字の描き方にも気を配り、明暗・質感を追求していた。

資料１　生徒Ｂ 丸めた紙のしわをかく」

資料 2-１　生徒Aのワークシートより



資料 2-２　生徒Bのワークシートより



生徒Aは、課題「よくみて描こう」の「よく観察する」という目的を理解し、紙のしわを描いていたときは、しわの線を目で追いながらゆっくりと１本１本ていねいに描いていた。耳を描いていたときは、全体の形を大まかにとり、軽く線を試すように重ねながら線を決定し強めていった。「つぶれた缶を描く」では、缶の上下の面を楕円ととらえて描き、ゆがんだりねじれたりしている胴体の線を目で追いながら、試し描きの線をはっきりした描線でつなげていった。自分の作品の仕上がりは「やや不満」と答えているが「絵をかくのが、少し、好きになった」とワークシートに書いている（資料２－１）。

生徒Ｂも、紙のしわ、耳、手のしわをよく見て描こうとしていたが、描線が一様に弱く、迷いやためらいが感じられる仕上がりとなった。「つぶれた缶を描く」のワークシートには、作品の仕上がりの満足度は、「ふつう」と回答していたが、「前よりよく観察できたと思います。少しうまくなった気もします」と書いている（資料２－２）。

他の生徒の感想では、「形がうまくとれるようになった」「明暗の調子の付け方がうまくなった」などと書いている生徒が14名いた。その他「よく観察できた」「立体的に描けた」

「強弱がうまくなった」「以前より本物らしく描けている」「写生が楽しい！！」などと書いている生徒も見られた。５月当初の調査で「美術が苦手」と答えていた９名の生徒のうち、８名が自己の作品や技術の向上について肯定的な感想を書いていた。残りの生徒１名は、「目が疲れて大変だった。」と感想に書いていたが、その内容や活動の様子から、集中してモチーフを見て描いていたことがうかがわれる。

また、資料２から判断すると、始業課題「よくみて描こう」のモチーフとして、既成の概念では簡単に形や明暗などを描けない「丸めた紙のしわ」「誰かの耳」「手のしわ」「つぶした缶」を設定したことやよく見てゆっくり線を描くことなどは、目の前にあるモチーフの形などをじっくり観察して描こうとする意識を高め、形などを追求するのに効果があったと考えられる。自分の作品に対する満足度で、「不満足」と答えた13名の生徒は、素描作品や生徒の話の様子から考えて、より高度な素描表現を求めていたことがうかがわれる。

資料３　始業課題を振り返ってのワークシートより（回答34名）

・自分の作品の仕上がりに十分満足した生徒	----８名
・自分の作品に対する満足度「ふつう」	----12名
・自分の作品に対する満足度「不満足」	----13名
・技術的に向上したと自分で思える生徒	----27名
・「よくみて描こう」は技能向上に効果があった	---24名

以上のことから、形や明暗を対象に即して見取れるような観察と表現を結びつける活動を取り入れたことは、対象の形・明暗・質感をとらえるのに有効であったと考える。

２　制作の過程において、修正の視点に気付くような観察と表現を結びつける活動を取り入れることは、修正してよりよく表すことができ、創造的な表現技能を高めるのに有効であったか

導入の過程までは、教師が提示したモチーフを素描で描いてきたが、制作の過程では、トレーニングの成果を表す「本制作」という意味を持たせるとともに、題材への生徒の思い入れを大切にしたので、描きたいモチーフを生徒が用意した。そして、素描に取り組んだ。

最初、形を大まかにとらえるとき、「図形に当てはめて描く」ことを行った。これは、モチーフの大まかな外形を、四角形や円柱など単純でわかりやすい図形でとらえて描く方法である。ほとんどの生徒は、用意したモチーフにうまく当てはまる図形に置き換えて全体の形をつかんでいた。しかし、モチーフの形にうまく当てはまらない図形を無理に当てはめようとして、進めなくなる生徒が数名いた。そこで、無理に図形を考えなくてもよいことを助言した。さらに制作を進める中で、全体と部分、部分と部分の割合を見極めて、必要なら修正を積極的に勧めたり、個別に形の狂いやゆがみを見つけて修正を促したりしたところ、生徒は、時間をかけて形を追求するようになり、その後、細部や明暗をよく見て描いていた。

作品完成後に実施したアンケートに書かれた感想をみると自己評価の中で「技能が向上した」と答えた生徒は34名中25名いた（資料４）。

資料４　作品完成後のアンケートより　（34名回答）

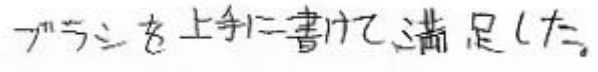
・素描が好き、素描をもっとやりたい	--- 28名
（この内、描く楽しさがわかった、非常に面白かった	
またやりたい等、特に肯定的だった生徒	--- 4名）
・素描の授業で技能が向上したと思う	--- 25名
・図形に当てはめることを理解し活用できた	--- 20名
・部分と全体の比較修正を理解し活用できた	--- 23名

中でも、５月当初に「美術が苦手、嫌い」と答えた９名のうち７名が技能の向上を認め、その内の５名は「自分の表現に満足している」と答え、６名は、「もっと素描

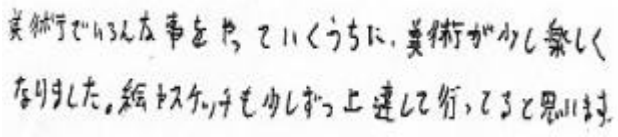
をやりたい」と感想を書いていた。あとの２名は、「ふつう」と回答している。他の生徒の多くは「以前より、形の取り方がうまくいった」「何となく楽に形を描くことができた」「本物らしさがでてきた」「いつもより絵を描くのが楽しかった」「よく観察できるようになり、うまくなった」「じっくり見て思い通りに描くことができた」などと感想を述べている。これらの感想からは、対象を見つめる中から、部分と全体の比例や部分相互の割合、明暗の変化、質感表現など、単に外形を線でなぞるところにとどまらず、よりよい表現を追求しようとする姿勢や意欲が感じ取れる。

生徒Ａは、「硬式」の野球ボールとボールブラシを組ませて描いていた。ボールの球体がなかなかうまく描けず苦労していた。そこで、「まずはブラシを完成しよう」と声をかけた。ブラシの形が直方体の中に収まると見たてて２～３本補助線を描き示してあげるときっかけがつかめ、ブラシの毛の部分と台木の部分をバランスよく描きあげた（作品Ａ－３）。そして、ワークシートに「以前より形のとらえ方がうまくいった」「毛全体がよくできたのでよかった」と書いた。時間内には、ボールを描き込む余裕はなかったが、自分の作品には納得し「ブラシが上手に描けて、満足した」（資料５－１）と感想を書いている。

資料５－１　生徒Ａのアンケートより


ブラシを上手に書けて満足した。

資料５－２　生徒Ｂのアンケートより


美術でいろんな事をやっていくうちに、美術が少し楽しくなりました。絵やスケッチも少しずつ上達して行ってると思います。

＊生徒Ａの作品の変化

作品Ａ－１］

5月「手のデッサン」

作品Ａ－２］

１０月「つぶした缶」

作品Ａ−3］

11月 身近な静物」

＊生徒Ｂの作品の変化

作品Ｂ－１］

5月 手のデッサン」

作品Ｂ－２］

10月 つぶした缶」

作品Ｂ－３］

１１月 身近な静物」

生徒Ｂは、円筒形の郵便ポストの貯金箱をモチーフに選んだ。はじめ、形の取り方に苦労し、縦横の割合も見取れていなかった。そこで、円柱の中におさめることや縦横の割合を見直すことをアドバイスしたところ、円柱を描き、縦横の割合をよく見て決定し、明暗表現もしっかりと描き込むことができた。ワークシートには、１枚目途中の自己評価は「やや不満」であるが「少しずつ、上達していってると思う」と書いている（資料５－２）。仕上がった作品を見ると学習が進むにつれて表現がしっかりしてきている（作品Ｂ１～３）。

以上のことから、修正の視点に気付くような観察と表現を結びつける活動を取り入れたことは、修正してよりよく表すことができるようになり、創造的な表現技能を高めるのに有効であったと考える。

Ⅶ　研究のまとめと今後の課題

○　形や明暗を対象に即して見取れるよう、吟味したモチーフによる「よくみて描く」素描訓練の中で、「観察と表現を結びつける活動」を行えば、生徒の観察する力は、磨かれ、表現と観察が結びついて、対象の形、明暗、質感などの特徴をしっかりとらえて表現できるようになり、創造的な技能の一つである素描の能力を高められることが明らかになった。

○　観察と表現を結びつける場面では、自分の表現の狂いに気付いて修正するための視点を持つことが必要であることが明確になった。

○　視点は、ものの形を大まかにとらえる図形の形であったり、縦横、全体と部分、また、部分と部分の比例であり、この視点をもって対象を追求し、修正をためらわず行うよう促すことで生徒の描写力も成長していくことが確認できた。

○　この研究を通して、「絵を描くことが楽しい、もっと上手に描きたい。」という生徒たちの喜びと意欲に満ちた声、苦手を克服したいという強い願いに触れ、より一層、一人一人の創造的な表現技能を高めるため、指導の工夫・改善を図ることの大切さを再認識できた。

〈参考文献〉

・Ｂ・エドワード　著　『脳の右側で描け』　マール社（1981）